



図書館だより



専門図書館協議会全国研究集会に参加して

本年5月31日・6月1日の両日、お台場・日本科学未来館で専門図書館協議会全国研究集会が開催されました。参加者170名、当館からは4名が出席しました。ちなみに当館の蔵書数10万冊は、専門図書館としては標準的規模です。

私の出席した分科会の状況は以下の通り。

第2分科会「IT時代に即した図書館サービスの新たな取り組み」では、最初に大学図書館の近況が報告されました。

インターネットの普及により図書館の入館者はどこでも減少しています。いくつかの大学ではこの10年間で入館者が30パーセント減ったということです。もっとも自宅にいて図書館のデータベースを使う学生は増えているので入館者の減少が、即、利用者の減少ではないのですが。

他方、利用者である学生の読書マナーも大きく変わっています。一定の場所でペットボトル等の飲み物の持ち込みを許し、またグループ学習のため私語を認めている大学が増えているとのことです。

この他、芝浦工業大学とアジア経済研究所からそれぞれ図書館のIT化の現状について報告がありました。

第6分科会のテーマは「ICタグにより、変わる図書館」です。

ICタグとは簡単にいえばバーコードの高度に発展したものであり、タグ上のICとリーダー・ライターの間で無線での情報のやりとりができる装置です。図書館で使えば図書の存在の確認、蔵書の点検、関連図書の検索等が容易にできます（国民を総背番号化して身分証明書の携帯を義務化し、ICにより完全に管理するというのは近未来SFの悪夢でしたが、民営刑務所では既に導入されています）。この日は研究者の解説の他、西村ときわ法律事務所図書館（当時）から3万冊の蔵書すべてにICタグを貼付しシステムを導入した経験が報告されました。

図書館をめぐる環境は大きく変わりつつあり、技術の発展は日進月歩であることを痛感しました。当館は時代の先端に行く必要はないが、社会全体の変化から大きく遅れてはならないでしょう。

そして、どのような図書館が必要かは、これからの弁護士がどのような活動をするかにより決まります。全会員、理事者、図書館委員、司書の協力により図書館をいっそう充実させ、活性化させることを願っています。

（東弁・二弁合同図書館館長 谷村 正太郎）

専門図書館協議会全国研究集会では、図書館界内外の様々な分野で活躍する講師陣による、バラエティに富んだ講演を聴くことができました。

午前に行なわれた第3分科会では、「守りと攻めの図書館実務」というテーマのもとに、①Web2.0が巷で話題となっている現在、図書館（員）がどうあるべきか、国内外の先進事例を参考にしながら、新たな図書館利用・サービスについて考察した他、②資料の劣化を現場で未然に防ぎ、さらに老化予防の措置をとることが、資料保存だけでなく、結果的に図書館のコスト削減にもつながるという、資料修復の専門家によるレクチャーが行なわれました。また、③NPO法人で活動する講演者が、自らの体験に基づいて語った図書館広報のコツについては、集客力に必要なのは、企画力やデータ収集もさることながら、何よりも大切なのは、担当者の熱意と努力であるという言葉が印象的でした。

午後に行なわれた第5分科会では、「図書館の一考察／先端事例に学ぶ」というテーマのもとに、①2003年に六

本木ヒルズに開館した、会員制図書館である六本木ライブラリーの創設にまつわる体験談を通じて、具体的な形として目に見えづらい図書館の収益をいかにアピールしていくか、実務家の視点に基づいた考察が展開されました。

また、②専門性崩壊がささやかれる司書職の現状について、図書館（員）に対するマイナスイメージに裏打ちされた社会的評価の低さを指摘し、広報活動とは、理解・共感・参加・協力を得るためのPRであると定義した上で、図書館（員）と利用者双方の意識改革の必要性が語られました。

研究集会をしめくくる全体会では、専門図書館の今後のあり方について、参加者とパネリストの間で議論が交わされました。

図書館の可能性を追求する様々な取り組みに刺激を受けると同時に、あらためて自分の現場での職務について思いをはせた1日でした。

（東弁・二弁合同図書館事務局 鳥海 晶子）